

由良川流域の古墳時代集落跡概観

西岸 秀文

はじめに

昭和59・60年度の2か年にわたり、綾部市で味方遺跡の発掘調査が行なわれ、筆者も60年度の調査を担当した。調査の結果、味方遺跡は縄文時代にさかのぼる複合集落遺跡であ



第1図 由良川流域の古墳時代後期集落遺跡分布図 (1/200,000)

1. 志高遺跡
2. 桑飼下遺跡
3. 三河宮の下遺跡
4. 高川原遺跡
5. 石本遺跡
6. 青野遺跡
7. 久田山遺跡
8. 綾中遺跡
9. 青野南遺跡
10. 味方遺跡
11. ケシケ遺跡
12. 奥谷西遺跡
13. 洞楽寺遺跡

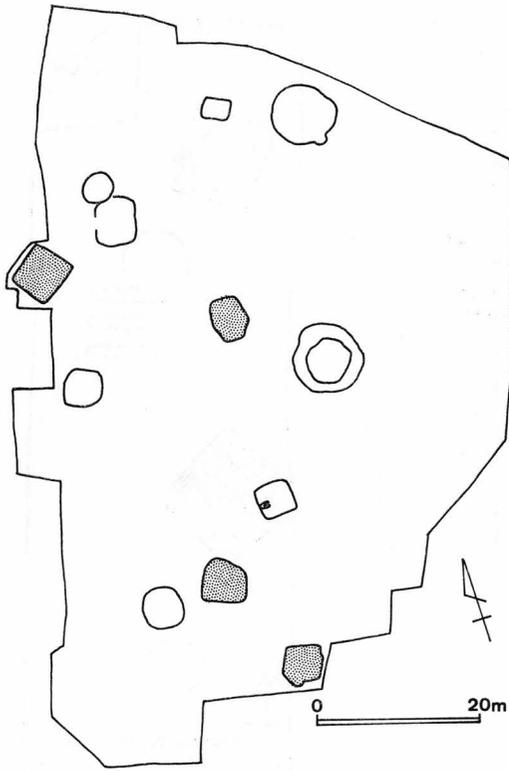
ることがわかった他、数多くの知見を得ることができた。そのうち、古墳時代後期と位置づけられる3基の住居跡に筆者は最も関心をもった。3基のうち2基は、いわゆる「青野型住居跡」^(注1)の一類型に相当する。それぞれ一辺が6.4m・8mと、現在まで京都府北部で報告されている住居跡では大型の部類に属する。特に一辺8mをもつ住居跡は、全容を検出した住居跡では最大の規模である。一方、もう1基の住居跡は攪乱のために全容は把握しえなかったものの、検出した一辺はわずか3.4mと小規模である。先の2基の住居跡と比較すると、床面積で4分の1以下になる。また、先の2基の住居跡が立派な造り付けのカマドをもつのに対して、一部に焼土塊をもつのみである。それでは、この差異の生まれる要因は何であるのか、こうした違いは味方遺跡に限る特殊なことなのか、あるいは、地域・時代などを考えてみたとき、一つの傾向としてとらえることができるものなのか。そこで、現在まで調査報告されている遺跡について、整理し若干の検討を加えてみたい。

本稿では、時期は古墳時代後期を中心に、地域は由良川流域に限定したい。古墳時代に限らず集落跡は、ほとんどの場合、縄文時代・弥生時代あるいはその他の時期と重複する複合遺跡として検出される。それは、いつの時代もその地点が集落を営むのに適していたからに他ならない。また、当時の生活を考える上で重要な要素として水の問題がある。交通手段の乏しかった時代に、河川のもった役割は非常に大きい。その観点からも、文化圏を考えるに一つの水系をもってするのは有効な手段となりうるものである。由良川は、京都府・福井県・滋賀県の接する三国岳の南裾を源とする、丹後・丹波地域では最大の河川である。川は美山町・和知町・綾部市東部を西に流れ綾部盆地に入り、さらに西に向かい福知山盆地に入る。そこで流れを北に変えて北西に向かい、大江町・舞鶴市を経て日本海に至る。流域の調査報告されている遺跡を上流から列記すると、舞鶴市の志高遺跡・桑飼下遺跡、大江町の三河宮の下遺跡・高川原遺跡、福知山市の石本遺跡、綾部市の青野遺跡・青野西遺跡・青野南遺跡・綾中遺跡・久田山遺跡・味方遺跡がある。さらに、福知山市に、支流の土師川水系に、ケシケ谷遺跡・奥谷西遺跡・洞楽寺遺跡がある。以上の多くの遺跡は古墳時代後期の竪穴式住居跡を検出している。それで、竪穴式住居跡の規模・形態等を手がかりとして、複数の住居跡を検出している遺跡について概観してゆきたい。

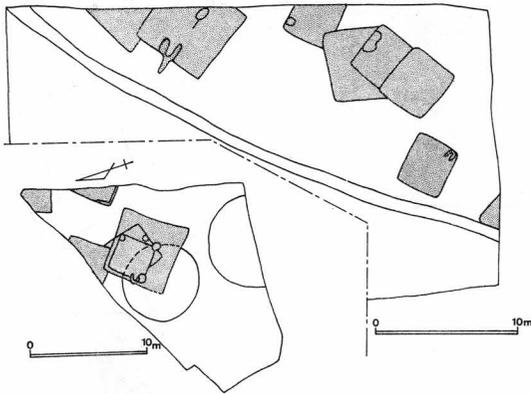
各遺跡の概要

1. 志高遺跡

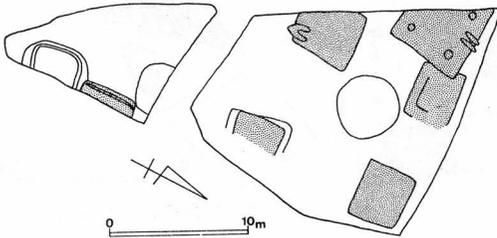
縄文時代前期から近世に至るまでの複合集落遺跡で、昭和55年度から調査主体を変えながらも継続して調査が行なわれている。遺構図に出しているのは昭和60年度の調査によるものである。古墳時代後期の竪穴式住居跡の配置図しか示していないが、その上層には奈



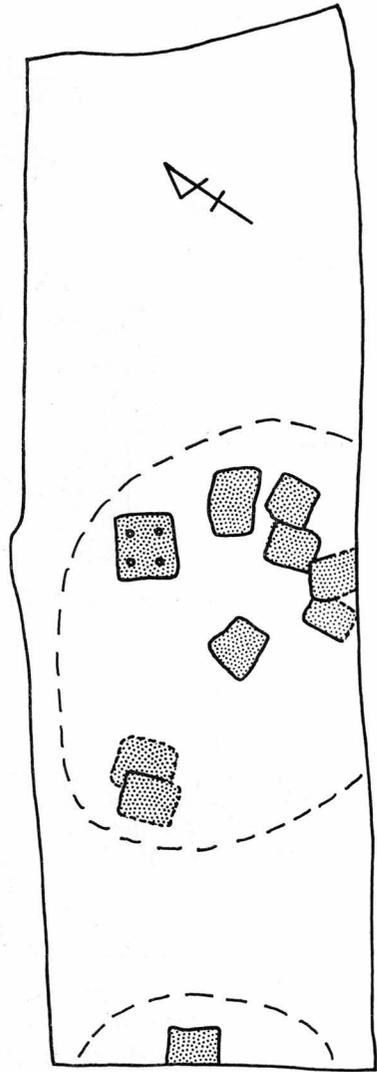
2. 奥谷西遺跡



3. 石本遺跡

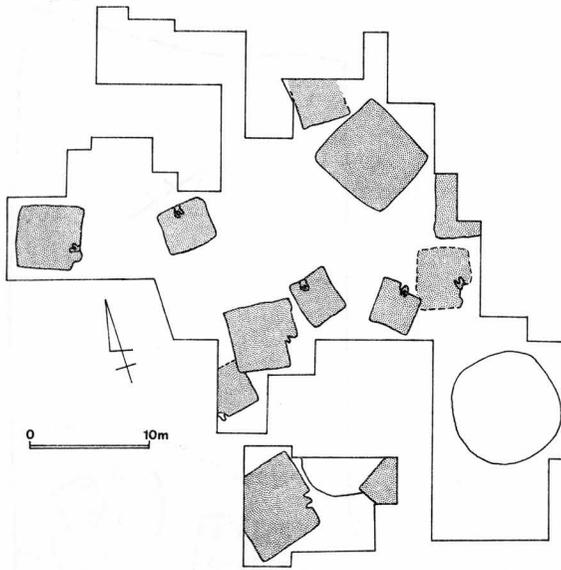


4. 三河宮の下遺跡

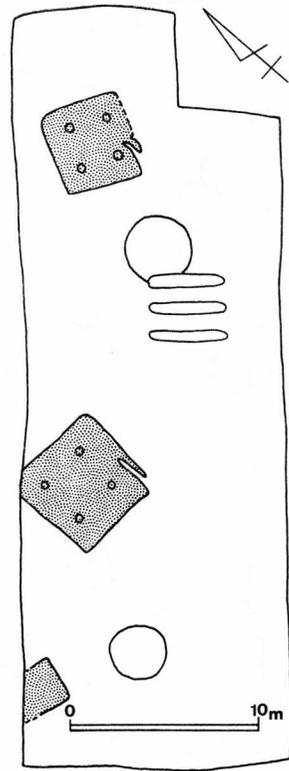


1. 志高遺跡

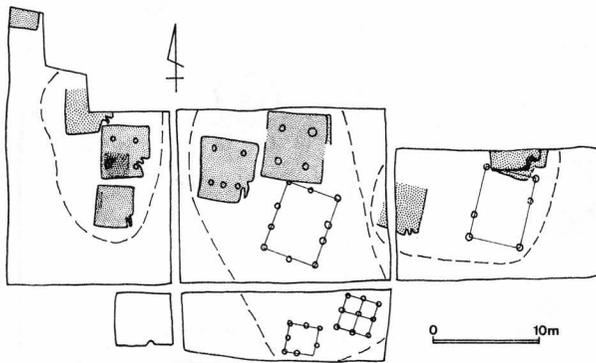
第2図 各遺跡遺構図(1)



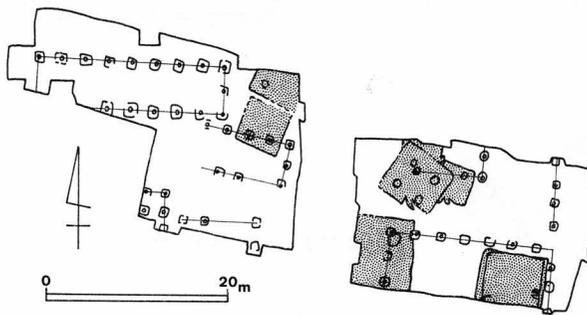
6. 青野遺跡 (A地点)



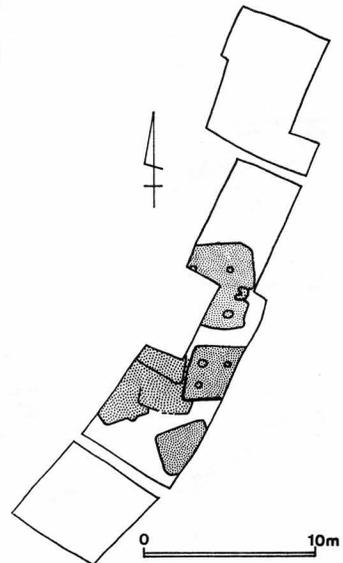
5. 味方遺跡



8. 綾中遺跡



9. 青野南遺跡



7. 青野遺跡 (第6次)

第3図 各遺跡遺構図 (2)

良・平安時代の掘立柱建物跡群が、下層には弥生時代中期の円形竪穴式住居跡群が検出されている。古墳時代後期の竪穴式住居跡は、計10基検出されており、一辺3.5～6mの規模をもつ。住居跡の分散状況より、中央の住居跡群が一つの単位集団かと考えられる。ここでは、数回にわたる建て替えもみられ、古墳時代後期に連続的に集落が営まれたとみられる。また、北東の住居跡は他のものよりも大型であることが目立つ。

2. 奥谷西遺跡

弥生時代中期から中世にかけての遺構を検出する複合遺跡である。弥生時代中期・弥生時代後期～古墳時代初頭・古墳時代後期と3時期の住居跡が検出されている。うち、古墳時代後期の住居跡は4基が検出され、6世紀の初頭に位置づけられている。カマドの報告されているものは、4基中2基であり、1基は長さが160cmと非常に長いものであった。規模は一辺4.5～6mとほぼ似通っているのが特徴である。

3. 石本遺跡

弥生時代中期から奈良・平安時代にかけての遺構を検出する複合遺跡である。古墳時代と考えられる住居跡は2地区に分かれ、計15基検出されている。出土遺物、あるいは数回に及ぶ建て替えが行なわれていることなどから、6世紀後半から7世紀に至るまで継続して集落が営まれたと推測できる。遺構図の左下に示したトレンチでは4回の建て替えが行なわれている。そこでは最後に建てられた住居跡の規模が一辺約6mと、それまでのものに比べて非常に大型化していることが注目できよう。また、最後に建てられたことにより6世紀末～7世紀初頭のものと同推察できる。

4. 三河宮の下遺跡

検出された遺構の多くは縄文時代であり、出土遺物も縄文土器が多くを占める。しかし、竪穴式住居跡の床面の出土遺物により、7基の住居跡が古墳時代後期のものと考えられる。出土遺物は少なく詳しい時期決定はされていないが、住居跡が建て替えられていることより後期に継続して営まれていると推測できる。うち、カマドの存在が確認できるのは3基できないのは1基、あとは不明である。ここでは、北東の住居跡が1基だけ突出した規模をもっている。

5. 味方遺跡

由良川はこれより上流域では山間部に入り、大規模な集落を形成できるのは当遺跡が最上流に位置する。ここでは、弥生時代中期から奈良時代までの遺構を検出している。古墳時代の住居跡は3基あり、うち2基は大型で「青野型住居跡」の形態をとる。もう1基は先の2基に比べて極端に小型でカマドも確認できない。出土遺物より、7世紀前半を中心とする「青野型住居跡」が最もさかんに作られた時期よりわずかに先行すると考えられる。

住居跡の他、同時期の布掘り状の掘立柱建物跡もあり、付随する倉庫の可能性が考えられる。

6. 青野遺跡(A地点)

青野遺跡は現在まで9次にわたる調査が行なわれており、弥生時代以後の複合集落遺跡であることがわかっている。A地点の調査は青野1次の調査にあたり、合計で13基の古墳時代の住居跡が報告されている。うち、「青野型住居跡」の形態をとるのは4基検出されている。時期決定には若干の問題点があり確実にはなしていない。ただ、A地点以後の青野遺跡の調査成果を考えると、「青野型住居跡」は7世紀前半を中心とするもので、A地点の住居跡もほぼ同時期のものであろう。そして、それ以外の小型の住居跡は古墳時代中期から後期にかけて、つまり、「青野型住居跡」出現以前のもと考えられる。「青野型住居跡」出現以前の住居跡の規模は、一辺が4m前後とほぼ同程度であったのに対して、「青野型住居跡」では一辺が3.5~7mと大きな差がでていることに注目できよう。

7. 青野遺跡(第6次)

青野A地点から道路を隔てた東側の調査で、同一の集落の一部かと考えられる。出土遺物の検討、あるいは4回に及ぶ建て替えが行なわれていることにより、青野A地点と重なり合う時期と考えられる住居跡が検出されている。うち、2基は「青野型住居跡」で、その中の1基はこの調査区域内では突出した規模をもつ。

8. 綾中遺跡

検出された遺構は、ちょうど竪穴式住居から掘立柱住居へと移行する時期のものであり、当地域の住居形態の移り変わりを示す重要な遺跡である。時期は出土遺物等により、7世紀前半と考えられる。ここでは、調査地中央で検出された竪穴式住居跡・掘立柱建物跡からなる一群が、その両側にある住居跡群より大規模であることに注目できる。さらに、その南側には倉庫であったと推測できる掘立柱建物跡2棟があり、中央の住居跡群に付属していた可能性も考えられる。これらの遺構を一つの単位集団として考えると、中央の住居跡群を作った一員が、他のグループよりも優位にたっていたと考えることも可能である。また、中央のグループの最大規模の住居跡が「青野型住居跡」でないことも、このグループの特殊性を示しているかもしれない。

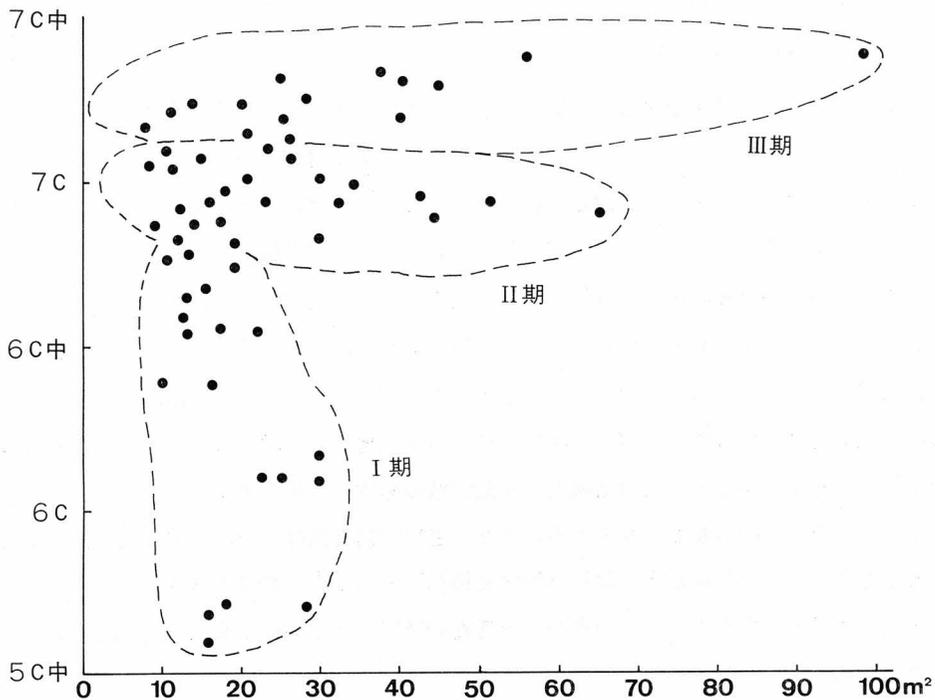
9. 青野南遺跡

出土遺物等より、7世紀前半から中葉と考えられる竪穴式住居跡を合計で10基検出している。この地点は同時に掘立柱建物跡群が検出されていることからわかるように、竪穴式住居から掘立柱住居への移行期と考えられる。掘立柱建物跡の規模・形態等は、周辺地域にはみられない大きさである。これは、この地点の集落が周辺地域での中心的な性格を

もっていたことを示しており、何鹿郡衙跡と推察されている。ここでは、推定規模ながら一辺が約10mと突出した規模の住居跡が検出されている。規模の他にも、青野型でないカマドの設置法・径1.2mと非常に大きい北東の柱穴・壁に沿って垂直方向に約2m間隔に掘られている柱穴等、他の住居跡にはみられない特徴をもつ。この住居跡は、ある意味で掘立柱建物跡群に連続するものかもしれない。

ま と め

これまで、9か所の遺跡について概観してきた。竪穴式住居跡の規模を中心にみてきたわけであるが、第4図はそれらの資料をベースにしてグラフ化を試みたものである。グラフは住居跡の面積を横軸に、年代を縦軸にとって、その相関関係を示している。面積は両辺の長さがわかっているものは縦×横で、一辺のみわかるものは単純にその辺を2乗して算出し、規模不明のものは対象から外した。また、年代は報告されている史料をもとに筆者が推定した。この位置づけはあくまで仮定であり、今後さらに詳しく再検討する必要がある問題である。グラフから第一に考えられることは、年代が下るに連れて住居跡の規模が分散化していくことである。全般に大型化するのではなくて小型・中型のものも共にそのまま残ると言う方が妥当であろう。試案として、これらをI期・II期・III期の3期に段



第4図 住居跡規模年代相関図

階的に分けて考えてみたい。それぞれの特徴は以下のとおりである。

I期：志高・奥谷西・石本・三河宮の下・青野(A地点)

奥谷西を除いて、数回の建て替えが行なわれており、I期はその前半の段階を指す。また、青野(A地点)では「青野型住居跡」に移る以前の段階のものである。この時期の特徴は、住居跡の規模に大差がなく、一辺4m前後のものが多数を占めることである。5世紀中頃から6世紀後半にあたる。

II期：志高・石本・三河宮の下・青野(A地点)・青野(6次)・味方

味方を除いて、数回の建て替えが行なわれており、II期はその後半の段階にあたる。また、青野(A地点)では、「青野型住居跡」の段階を指す。この時期の特徴は、住居跡の規模に大きなばらつきがみられるようになることである。全体的に大型化するのではなくて、分散化すると考えるのが妥当である。この時期は、綾部市域では「青野型住居跡」が出現し始めた時期である。6世紀末から7世紀初頭にあたる。

III期：綾中・青野南

綾部地域で住居跡が竪穴式から掘立柱に移る過渡期である。「青野型住居跡」がさかんに作られ、住居跡の規模はII期と同様に分散化している。さらに、それまでの住居跡と性格を異にすると考えられる大型の住居跡もみられる。7世紀前半から中葉にあたる。

以上のように、II期を境にして住居の規模に大きな差異がみられるようになってくることがわかる。さらにIII期に至っては、青野南遺跡の大型住居跡にみられるとおり、その構造にも変化が現れてくる。住居跡の変化より考えられるのは、この時期が由良川流域の社会に大きな転換点となっていることである。II期で住居跡群を構成する単位集団内と身分的格差が住居跡の規模に現れ、III期に至ってはさらにその傾向が顕著になっていくことが推察できる。それまでであった世帯共同体が、単位集団内に身分的格差をもった家父長制的世帯共同体へ移行してゆく過程の中でとらえることができようか。綾部地域に限ると、青野南の大型の掘立柱建物跡群が、何鹿郡衙に相当する地方官衙的な建物跡とするなら、周辺地域が青野南を中心とした政治権力の支配領域の範囲内に組み込まれていたことも想定でき、その点からの考察も必要である。また、古墳時代後期はさかんに群集墳が作られる時代でもあり、この時期が大きな社会的な変換期にあることが想像でき住居跡の形態の変化と関連づける必要もあり、この点からの考察も当時の社会的様相を知るのに有効な手がかりとなる。

現在の発掘調査の実状からは、集落跡の全容を知るのは非常に困難である。ゆえに、近

隣地域の同様の性格をもつ考古資料をまとめて考えてみることも、研究の有効な手段となろう。本稿では理論的な検証作業は行えず、見通しを述べたに過ぎない。今後、考古資料・文献史料合わせて多面的に論及してゆく作業が必要であり、重要となるであろう。

(西岸秀文＝当センター調査課調査員)

注1 青野型住居 竪穴式住居の一角を掘削段階から掘り残して造り付けのカマドを設置する住居跡が綾部市内で数多く検出された。中村孝行氏は、「青野遺跡第5次発掘調査概報」で、それまでその形状から「カマドを置く一辺の半分が蹴込まれた形」とか「扁平な『L』字形」と形容された住居跡の名称を、「青野型住居跡」と統一された。本稿でもそのまま青野型住居の名称を統一して用いてゆきたい。

参 考 文 献

1. 志高遺跡

杉本嘉美『志高遺跡調査概要』舞鶴市教育委員会 1981

吉岡博之『志高遺跡—昭和56年度花ノ木・ストロ葎下地区および久田美地区の調査概要』(舞鶴市文化財報告 第6集 舞鶴市教育委員会) 1982

吉岡博之ほか『志高遺跡—昭和57年度カキ安地区の調査—』(舞鶴市文化財報告 第4集 舞鶴市教育委員会) 1983

吉岡博之『志高遺跡—昭和58年度カキ安・舟戸地区の調査概要—』(舞鶴市文化財報告 第7集 舞鶴市教育委員会) 1984

岩松 保「志高遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第16号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985

山下 正・肥後弘幸『志高遺跡』(京埋セ現地説明会資料 No. 86-01 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986

2. 桑飼下遺跡

渡辺 誠編『桑飼下遺跡発掘調査報告書』舞鶴市教育委員会 1975

3. 三河宮の下遺跡

竹原一彦「三河宮の下遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』京都府教育委員会) 1981

竹原一彦「三河宮の下遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第2冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982

4. 高川原遺跡

中谷雅治ほか「高川原遺跡発掘調査報告書」(『大江町文化財調査報告』第1集 大江町教育委員会) 1975

5. 石本遺跡

辻本和美「福知山市石本遺跡の調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第14号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984

6. 青野遺跡

山下潔巳・川端二三三郎・中村孝行・鈴木忠司・釋 龍雄「青野遺跡A地点発掘調査報告書」(『綾部市文化財調査報告』第2集 青野遺跡調査報告書刊行会) 1976

増田信武・中谷雅治ほか「青野遺跡第2次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第3集 綾部市教育委員会) 1977

- 増田信武・中谷雅治ほか「青野遺跡第3次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第4集 綾部市教育委員会) 1978
- 中村孝行「青野遺跡第4次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第8集 綾部市教育委員会) 1981
- 中村孝行「青野遺跡第5次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第9集 綾部市教育委員会) 1982
- 辻本和美・増田孝彦・小山雅人「青野遺跡第6・7次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第6冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
- 小山雅人「青野遺跡第8次」(『京都府埋蔵文化財情報』第6号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
- 三好博喜「青野遺跡第9次」(『京都府埋蔵文化財情報』第16号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 中村孝行「青野・綾中地区遺跡群の調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第3号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
- 小山雅人「青野西遺跡の発掘調査について」(『京都府埋蔵文化財情報』第9号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1983
7. 久田山遺跡
大槻真純「久田山一久田山遺跡・久田山南遺跡発掘調査報告書」(『綾部市文化財調査報告』第5集 綾部市教育委員会) 1979
8. 綾中遺跡
中村孝行「綾中遺跡発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第9集 綾部市教育委員会) 1982
9. 青野南遺跡
中村孝行「青野南遺跡発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第9集 綾部市教育委員会) 1982
- 中村孝行「青野南遺跡第3次・第4次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第10集 綾部市教育委員会) 1983
10. 味方遺跡
辻本和美「味方遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第15号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
11. ケシケ谷遺跡
岩松 保・藤原敏晃「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡(3)ケシケ谷遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第10冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984
12. 奥谷西遺跡
藤原敏晃「奥谷西遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第15号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
13. 洞楽寺遺跡
岩松 保「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡(1)洞楽寺遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第10冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984